

## 女子大生における当為自己 (Ought-to-be-self) に関する一考察

— 感情尺度との関連から —

池澤直美

### I. 研究目的

人は、誕生した瞬間から社会的存在として、多くの人や事物との関係の中で生活し、こうした中で、我々は他人を知り、そして自分をも知っていくのである。人は自分以外の存在との関係を通して、自己意識を発達していくと考えられ、今日まで研究が行なわれてきた。James, W. (1890) や Mead, G. H. (1934) を初め様々な研究者によると、「自己意識の発達は、初めは他者との関係から取り入れた外的な基準であったものが、経験や体験を積むことで個人内に内在化されて内的基準になり、自己意識の基準が形成されていく」のである。さらに様々な研究によって、自己意識が自己の行動決定における準拠枠 (frame of reference) としての機能を果たすということも指摘された。これ以降、それまでは社会規範からの逸脱という外的基準から適応の問題が論じられていたが、適応の問題は個人の内的自己意識を基準として論じられ、その準拠枠として「その人がなりたい」という『理想自己 (ideal self)』を取り上げ (Rogers, C. R.: 1951)、現実自己 (現実の自分) との差異が大きいほど不適応になりやすいと述べられてきたのである。

ここで従来述べられてきた自己意識の理論を概観すると、James, W. (1890) は自己を物質的自己・社会的自己・精神的自己の3つの自己を想定し、初期は物質的自己であったものが、次第に発達して精神的自己にまで分化し統合されていくと体系的に論じている。また、精神分析家である Freud, S. (1918) も自我の発達理論の中で、自我は人からの禁止や規則を取り入れて、「こうなりたい」という理想自我と、「こうしなければいけない」という超自我 (super ego) を形成していくと論じており、準拠枠として働くのは理想自己の側面だけではないことを主張しているようである。さらに、日本人特有の病気として、対人不安が挙げられ、「～しなければいけない」「～して当然」という訴えが報告されていることなどよりも考えると、日本人は<世間体>という言葉で代表されるように他者の目、眼差しを気にする民族であり、自分自身の枠組を他者との関係より作り出しているように思われる。つまり、準拠枠として理想自己、1つだけではないと思われる。

そこで、「～しなければいけない」「～して当然」とい

う考えから生じるであろう自己を Higgins, E. T. (1989, 1990) の述べる『当為自己 (ought-to-be-self)』と定義づけ、研究していくことにする。Higgins, E. T. (1989, 1990) によると、当為自己 (ought-to-be-self) と現実自己の差異は動揺など感情興奮を引き起こし、理想自己と現実自己との差異は欲求不満や落胆などの感情を引き起こすという結果を報告している。つまり、理想自己と当為自己 (ought-to-be-self) とは起源を一にしながらも、異なった働き・構造を持っているのだろう。

以上より、本研究では当為自己 (ought-to-be-self) を不安感情との関連より理想自己との相違点、類似点を明らかにし、当為自己 (ought-to-be-self) の構造・働きを検討していくこと目的とする。

### II. 予備調査

【目的】当為自己 (Ought-to-be-self) はどのような側面を保持し、理想自己とはどのような側面で異なるかを明らかにし、自己意識尺度項目を検討する。

【方法】女子大生45名 (4年大学: 4名, 短大: 40名) を対象に一对一の半構造化面接で行われた。面接の所要時間は20~60分 (平均約45分) であり、面接の記録は全て被面接者の承諾を得て、テープレコーダーに記録された。

【結果と考察】まず、テープレコーダーに記録された内容から逐語録を作成し、さらに語られた内容を要約、分類した。

結果に要約された45ケースから当為自己 (Ought-to-be-self) ・理想自己の諸側面を取り上げた。当為自己 (Ought-to-be-self) には対人関係や社会的・道徳的な外に向う自己の側面である、他人のイメージを大切にという [社会性] ・ [優しさ] ・ 真面目にするという [誠実さ] の3側面が、理想自己には自己内に向う側面、冷静に処理できるようにという [理知的] ・ 積極的になりたいという [意欲・強さ] の2側面が取り上げられた。

### III. 調査1

【目的】予備調査で得られた自己意識尺度の作成、及び尺度の妥当性・信頼性の検討を行い、当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己の側面相違点・類似点を明らかにすることを目的とする。

【方法】女子大生610名 (4年大学: 350名, 短大生:

360名) を対象に当為自己 (Ought-to-be-self) 尺度を用いた質問紙調査を1995年11月～12月上旬にかけて集団式で実施した。質問紙は、予備調査によって取り出された当為自己 (Ought-to-be-self)、理想自己の諸側面より挙げられた24対の形容詞で構成された。この24対の形容詞について、①現実自己 [現在の自分にどの程度あてはまるか]、②当為自己 (Ought-to-be-self) [こうしなければと思う程度]、③理想自己 [こうなりたと思う程度] を尋ね、6点尺度で評定させた。

【結果と考察】当為自己 (Ought-to-be-self) 尺度については因子分析により、「道徳性」・「外向性」の2因子が、理想自己については「社会性」・「理知性」の2因子が認められた。モデルで検討したような3因子は認められなかったが、当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己には質的な違いがあることが示唆された。しかし、下位尺度における相関関係を求めると、 $r = 0.6$  以上の高い相関が認められた。これより、当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己は根本は同一であり、James, W. (1890) や Freud, S. (1914) の自己の発達理論を支持する結果と言えよう。つまり、社会的な望ましさとという方向性を伴っているものであると考えられよう。

#### IV. 調査2

【目的】Higgins, E. T. (1987, 1990) は当為自己 (Ought-to-be-self) が現実自己から離れていると憂鬱などの感情興奮を生じ、理想自己が現実自己から離れているときは落胆や欲求不満の感情を生じさせやすいと述べている。この理論に従い、当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己の相違点を明らかにするために、顕在不安感情との関連から検討していくことを目的とする。

【方法】女子大生300名 (4年大学: 180名, 短大生: 120名) を対象に自己意識尺度を用いた質問紙調査を1995年11月に集団式で実施した。質問紙は、調査1によって使用された自己意識尺度、顕在不安感情尺度 (「ここ2～3週間の感情」) で構成された。

【結果と考察】顕在不安感情尺度は「神経症的不安」「鬱的不安」「強迫的不安」「自己不満」の4つの因子を抽出した。さらに、当為自己 (Ought-to-be-self)、理

想自己を一因子として扱い、それぞれと現実自己と差異においてどのような不安感情を示すかを検討するために4元配置の分散分析を行った。その結果、当為自己と現実自己の差、理想自己と現実自己の差が大きいほど、自分に対して不満感を感じ、くよくよとして悩んでしまうことが示された。また、当為自己 (Ought-to-be-self) が高い人ほど、強迫的感情や鬱的感情を持っているということも示された。これは理想自己が高い人とは異なる結果であり、理想自己と当為自己 (Ought-to-be-self) によって生じる感情に少なからず違いがあるということが示された。つまり、理想自己よりも当為自己 (Ought-to-be-self) の高い人の方が自己に枠をはめ、視野を狭べて心のゆとりがないようであるといえよう。

#### V. 調査3

【目的】さらに、当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己の相違点を明らかにするために当為自己 (Ought-to-be-self) の社会的な側面、とりわけ人との関係を取り上げて検討していくことを目的とする。

【方法】女子大生310名 (4年大学: 170名, 短大生: 140名) を対象に自己意識尺度を集団式で実施した。質問紙は、調査1によって使用された24対の形容詞で構成された自己意識尺度、さらには鬱傾向測定尺度 (HSCL: 1963)、対人不安尺度 (梶田, 1988) で構成された。

【結果と考察】当為自己 (Ought-to-be-self) と理想自己を一因子として扱い、それぞれと現実自己の差との関連より鬱症状、対人不安尺度における4元配置の分散分析を行ったが、その結果、全く関連が見いだされなかった。つまり、この要因としては、大学入試を終え、ほっとしている女子大生という対人葛藤の少ない年代を対象にしたこと、さらには、伊藤 (1990) の述べるように大学生になると準抛枠と比較して自己を評価するのではなく、自己の価値観や自尊心などにより自己を評価するためにこのような結果になったというよう。今後さらに、当為自己 (Ought-to-be-self) ・理想自己の差異、当為自己 (Ought-to-be-self) が引き起こす感情を明らかにするために、対人力葛藤の多い思春期を対象に検討してみる必要があるだろう。